

## 日本文化を巡る旅

Keiko Nishie 西江 桂子  
(サンパウロ大学)



日本の伝統を研究する外国の研究者にとって大きな困難の一つは、研究対象に直接接する機会がないことです。私が神奈川大学非文字資料研究センターの交換プログラムに申し込んだ時には、“工芸”に関する私の研究にとって、現場の経験がどれだけ有益なものとなるのか想像すらしていませんでした。

植民地期のブラジル経済はもっぱら農業を基盤とし、製品の製造は禁止されていました。故に、商品を作るということに関してはあまり発展しませんでした。それに加えて、私たちの美術の歴史はヨーロッパの伝統に基づいており、工芸品は16世紀以来、美術品とは切り離されてきました。これらすべての要因が、ブラジルにおける工芸活動の地位の低下をもたらしたのです。日本の美術史においては、このような分離は決して起こらず、“工芸”は最も重要な美術分野の一つと捉えられています。歴史学者として、また日系ブラジル人として、私は“工芸”の保存と現代日本との関連性に魅力を感じてきました。

日本を訪れる準備のための数カ月間、非文字資料研究センターのスタッフは、私のビザ申請の書類やその他の準備のための情報提供などの手助けをしてくれました。鳥越教授は私が日本に滞在中どこを訪れるべきか提案してくださったり、美術館などの資料を集めてくださったりと、とても協力的に指導してくださいました。私の不安に反して、最初から私は歓迎され、心遣いを感じました。ついに私の初めての日本への旅が始まりました。

神奈川大学は、19世紀における日本の対外貿易の拠点の一つとして開かれた港町横浜に位置しています(写真1)。横浜開港資料館への訪問は大変有意義なものとなりました。同じ日、地元在住のチューターさんに中華



写真1 大橋からの横浜ベイ

街や元町を案内してもらいました。そこはとても国際色豊かで歴史に満ちた印象を私に与えました。

東京ではいくつかの重要な美術館を訪問し、作品の展示における分類上の指針 (curatorial guidelines) などを確認する機会を得ました。東京国立博物館では洗練された用具類や地域によって異なる工芸技法の品々を通して、日本の有形文化を概観することができました。東京国立近代美術館工芸館は工芸品の展示において、より芸術的な観点からのアプローチをしています(ここでは、それぞれの工芸品が芸術的名作として紹介されています)。日本民藝館(写真2)のコレクションは、他とはかなり異なっており、主に無名の職人によって作られた日常生活の中で使う物で構成されています。これらのコレクションのそれぞれが“工芸”に対する異なる思想を反映しており、私はこの三者三様の分類上の多様性 (diversity) そのものが、日本の芸術的アイデンティティにおいて工芸品が持つ重要性を明らかにしていると思います。



写真2 日本民藝館

私は数ある中でも、サントリー美術館、太田記念美術館、細見美術館、清水三年坂美術館を訪れました。日本のほとんどの施設は写真撮影禁止という規則があり、それは当初、私にとって悩みの種でした。そこで、観察記録を記すための小さなノートを用意しました。ノートに記録することで写真撮影だけでは決して気づかない作品の細部に注意を払うことになりました。

美術館の他に、横浜の近隣にある箱根や鎌倉へ行くこともできました。そこでは職人の仕事場や工芸品の店を訪れました。寄木細工と鎌倉彫の独特な木工技術を見ることは豊かな経験になりました。そしてまた、短い旅ではありましたが京都へ行く機会もありました。京都では



歴史地区や職人たちの町を訪ねたり、時代祭を見たりしました。(写真3、4)



写真3 時代祭1



写真4 時代祭2

非文字資料研究センターのプログラムは、歌舞伎や伝統的な建築物といった、他の多くの表現形式からも日本文化の幅広い経験を得る機会を与えてくれました。これらすべての要素が、芸術品そのものの理解にとどまらず、それらを守り伝え、価値を与える文化的背景をも視覚化し、理解することに役立ちました。

最後になりますが、日本の人々はとてもフレンドリーだといえます。日本の人々は外国人がどれだけ日本の文化を好んでいるかを知り喜ぶとともに、私たちの文化にも興味を示してくれます。私は日本への最初の旅で、日本の皆さんがリオのオリンピックについて質問してくれたことや、私の下手な日本語にも寛大で居てくれたことを思い出し懐かしく思うでしょう。そしてまた、日本での日々の生活や近所の商店街、フィールド調査からの帰りに毎晩私が「ただいま」と声を掛けていた、アパートの隣のお地蔵様を思い出し、懐かしく思うことでしょう。

## 学問に終わりなし、人情に真価あり

—私の日本訪学記

周 全明  
(北京師範大学)



今回の日本への短期訪問研究が決まった時、喜びはあったものの、一方でそれまでずっと民俗学は特定の地域で展開されてきた学問で、その研究のためには必ずしも外国に行く必要がないと思っていたことも事実であった。しかしながら、今回の訪問によって自分は見識を広げ、間違いなく大きな収穫を得ることができた。

到着したその日は宿泊先に直行し、翌日に神奈川大学非文字資料研究センターを訪れた。3日目にチューターの程亮博士と日本滞在中の研究調査に関する打ち合わせをし、4日目に神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究所の佐野賢治教授のご指導をいただき、自分が取り組んでいる研究課題「経験と実践—日本民俗文化財保護に関

する研究」の調査をスタートさせた。

程さんの流暢な通訳のおかげで無事調査地を訪れ、様々な調査対象の方に話を伺うことができた。佐野先生と山形県にある農村文化研究所理事長の遠藤宏三先生を訪問した後、松戸市立博物館学芸員の青木俊也博士と、文部科学省文化庁文化財調査官の石垣恒氏にそれぞれインタビューを行った。その後、沖縄民俗芸能の上演と第58回関東ブロック民俗芸能大会を鑑賞し、農村文化研究所置賜民俗資料館と米沢市上杉博物館、江戸東京博物館、東京国立博物館、横浜美術館、さらに各地に散在する神社を見学した。